

焼夷弾

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

焼夷弾（しょういだん 英：Incendiary bomb）は、爆弾・砲弾の一種で、攻撃対象を焼き払うために使用する。焼夷剤として使う物としては、主に後述するテルミットや油脂、黄燐の他にも重油などが用いられている。

<概要>

主として、テルミット反応を利用したエレクトロン焼夷弾、油脂の燃焼を利用した油脂焼夷弾、黄燐の自然発火現象を利用した黄燐焼夷弾の3種が利用される。

米軍が東京大空襲で使用した M69 集束焼夷弾や、ベトナム戦争で多用されたナパーム弾が有名。

余談だが、黄燐焼夷弾の不発弾が地中に埋まり、それを含んだ土や岩が掘り起こされたりなどして空気に触れ発火する、という事故が沖縄やフィリピンで起こり、新種の鉱物か、と騒がれたことがある。

<M69集束焼夷弾>

木造の日本家屋を効率よく焼き払う為、第二次大戦時に米軍が開発した焼夷弾。複数の焼夷弾をひとまとめとしたクラスター構造を取っており、投下後に上空 700 m程度で 48 発の子弾へ分離し、一斉に降り注ぐ。

子弾 1 発あたりの大きさは、直径 8cm・全長 50cm・重量 2.4kg 程度。

「モロトフのパン籠」という異名がつけられていた。この異名はもともとソ連・フィンランド戦争時のモロトフの発言からフィンランド国民が航空爆弾一般に名付けたものであったが、これに加えて上記のような構造がパン籠を連想させたことから、日本では特にこの爆弾の異名として用いられることが多い。

<人体への直撃による被害>

焼夷弾は目標を焼き払う為の兵器であるが M69 は子弾が非常に小型であり、尚且つ分離し大量に降り注ぐ為 直撃による即死が多くの被災者の証言に見られている。

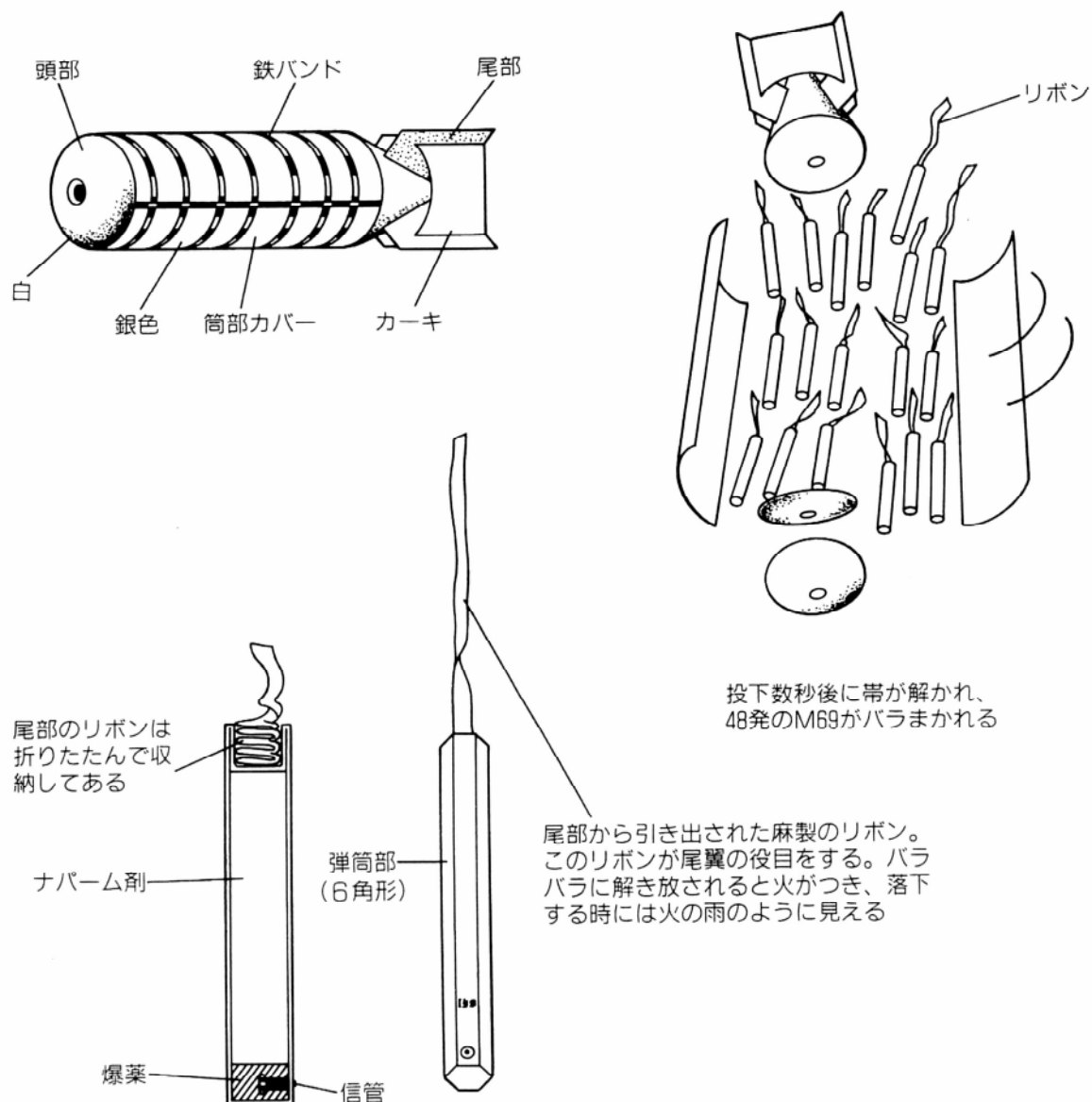
例えば戦争を題材にしたアニメ・映画では 落下した焼夷弾が家屋や地面に激突し大爆発を起こし燃え上がる描写が多く見られる。だが実際には避難民でゴった返す大通りに大量に降り注ぎ 子供を背負った母親や、上空を見上げた人間の頭部・首筋・背中に突き刺さり即死、そのまま燃え上がるという凄惨な状況が多数発生していた。

<「火の雨」の様に見える理由>

M69 の発火は、対象への激突後である。しかし「火垂るの墓」をはじめとする戦争映画等では、火のついた焼夷弾が「火の雨」となって落下する描写がある。（多くの空襲被災者の証言にも見られる）

M69 の子弾には、目標(木造家屋の瓦屋根等)への貫通力を高めるため 姿勢を垂直に保つ目的のリボン(細長い布)が取り付けられている。上空での分離時に使用されている火薬によって、このリボンに着火し それがあたかも火の帯のようになり一斉に降り注ぐ為、火の雨が降るように見えるのである。

M69集束焼夷弾を分解すると



参考『東京大空襲・戦災誌』

<一口メモ> アントニン・レーモンド

建築家ライトの弟子、チェコ生まれ。戦前の日本に在住し多くの作品を建築した。

日米開戦前にアメリカに戻り、焼夷弾M69開発（チーフはスタンダード石油の副社長ラッセル）に協力。日本住宅に精通していた彼は、アメリカ・ユタ州に実験場で日本の長屋住宅を建築、室内の「ちゃぶ台」に至るまで精密に再現して実験用に提供したという。「戦争を早く、効率的に終了させるため」というのが協力の理由。

戦後、また来日して無差別爆撃の現実を見た時、どんな思いがしたのでしょうか。



焼夷弾実験用の日本住宅